

序論)

私達は先週、「アッシリアが自分は様々な国々の神々を支配し、エルサレムの神をも同じようにする。」と高ぶっていたけれども、それはアッシリアが神様のさばきのための道具として用いられていたからであって、アッシリアに神様をも支配する力があるわけではなかったこと、そして、そのように高ぶるアッシリアを神様が罰せられると言っておられることを見てきました。

今日はその話のつづきとなります。

アッシリアの高ぶりその2)

13節から14節には再びアッシリアの高ぶった言葉がかかれており、15節にはそのアッシリアの高ぶりが間違いであることが示されています。

アッシリアの高ぶりのことばを読みましょう。13-14節

10:13 それは彼がこう言ったからである。「私は自分の手の力でやった。私の知恵でやった。私は賢いからだ。私が諸国の民の境を取り払い、彼らの蓄えを奪い、全能者のように住民をおとしめた。

10:14 私の手は、諸国の民の財宝を巣のようにつかみ、私は、見捨てられた卵を集めるように地のすべてのものを集めたが、翼をはためかす者も、口を大きく開ける者も、鳴く者もいなかった。」

つまり、「アッシリアは全部自分の力でやったことであり、自分に対抗できるものは一人もいなかったのだ。」といているわけです。14節の「翼をはためかす者も、口を大きく開ける者も、鳴く者もいなかった。」というのは、抵抗者が一人もいなかった。ということです。

アッシリアは周辺諸国を支配することを、鳥の巣から卵を取ることに例えて表現しています。普通、鳥の巣から卵を取ろうとすると親鳥が一生懸命抵抗しますが、アッシリアにとって占領した周辺諸国は、翼をはためかし、口を大きくあけて、大声で威嚇するような親鳥がいないような状態であり、「楽勝だった。」っとそういつているわけです。

でも、それはアッシリアをさばきのための斧として使った神様を無視することばであり、特に13節の「全能者のように」という発言は、勘違いも甚だしいことばでした。そのため15節では、

10:15 斧は、それを使って切る人に向かって高ぶることができるだろうか。のこぎりは、それをひく人に向かっておごることができるだろうか。それは、むちが、それを振り上げる人を動かし、杖が、木ではない人間を持ち上げるようなものではないか。

といわれています。

私達は「ある意味では」神様の道具でしかないのです。「ある意味では」ですよ。別に神様が私達のことを愛しておられないとか、そうゆうことではないのですが、神様に自由に用いられる存在であり、神様が自由に私達を使うことができる。という意味では、私達は神様の道具なのです。例え、まことの神様を信じていようと、信じていまいが、私達は神様の思う通りに使われる存在なのです。

にもかかわらず、「神がいるのならばこのようにするべきだ。」とかいたり、「神がいるのならば、なぜロシアにウクライナを攻めさせたのか。」「神がいるのならば、なぜ、悪人をそのままにしているのか」そのように言ったりするのは、自分と神様の関係を勘違いしているにほかならないのです。

神様が私達をどのように使ったとしても、本来は、文句をいうことができない関係、それが私達と神様の関係です。

ましてや、神様に使われた結果、物事が自分にとって都合のいいように進んだからといって、「自分の力でやった、自分の知恵でやって、私は賢いのだ」なんて誇るの事は、愚かなことでしかありません。

アッシリアに対する主のさばき)

でも、アッシリアはそうのように高ぶってしまったから、主は炎となって高ぶったアッシリアを燃やし滅ぼすのだ。と、そのように 16 節から 19 節で語られています。

その部分を読んでみましょう。16-19 節

10:16 それゆえ、万軍の【主】、主はその最も肥え太った者たちをやつれさせ、その栄光のもとで、炎が燃え上がる。

10:17 イスラエルの光は火となり、その聖なる方は炎となる。燃え上がって、そのおどろと茨を一日のうちになめ尽くす。

10:18 主はその美しい林も果樹園も、また、たましいも、からだも滅ぼし尽くし、それは病人が痩せ衰えるときのようになる。

10:19 その林の木の残りは数えるほどになり、子どもでもそれらを書き留められる。

最後の「子どもでもそれらを書き留められる」という言葉の意味がわかりにくいと思いますので説明すると、旧約聖書の言語であるヘブル語にはヨッドという字があります。日本語の「あいうえお」英語の「abc」のようにヘブル語にもアルファベットがこのようにあって、その中でも十個目の字が「ヨド」は、このようにみてわかるように点をチョンとやるだけなので、小さなこどもでも書ける字です。

神様は、「大帝国アッシリアを主の炎でもやして、このヨドのような小さな消し炭にするよ。」といわれているのです

どんなに繁栄を極めていたとしても、本当の支配者である【主】によるのならば、ヨドのようにされてしまう。それが高ぶる者の結末なのです。

さばきを通して立ち返らせる主)

そして、20節からはまたイスラエルに対する預言となります。

まずは20節から23節を読んでみましょう。

10:20 その日になると、イスラエルの残りの者、ヤコブの家の逃れの者は、もう二度と自分を打つ者に頼らず、イスラエルの聖なる方、【主】に真実をもって頼る。

10:21 残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。

10:22 たとえ、あなたの民イスラエルが海の砂のようであっても、その中の残りの者だけが帰って来る。壊滅は定められ、義があふれようとしている。

10:23 すでに定められた全滅を、万軍の【神】、主は、全地のただ中で起こそうとしておられる。

20節に「その日になると」とありますが、「その日」とは、アッシリアが裁かれた日というよりは、神様のさばきの御業がことごとくなされた日のことです。

狭い意味でいうと、アッシリアによって北イスラエルが滅ぼされ、そのアッシリアと南ユダ王国はバビロンによって滅ぼされ、バビロンはペルシャによって滅ぼされ、そして、そのペルシャのキュロス王によって捕囚となったユダヤ人たちが戻ってくる日のことを指しています。一度滅ぼされたイスラエルという国が、バビロン捕囚があってもなお残った者たちによって再建されて、エルサレム神殿をもう一度建て直し、彼らが神様に立ち返るようになる。というのが、この20節から23節の預言の狭い範囲での意味です。

でも、これには、もっと大きなスケールの意味もあって、アッシリアやバビロンにかぎらず、世の終わりのときに【主】のさばきの御業がことごとくなされる時がきますけども、そのさばきによる滅びがあってもなお、残る者イスラエルの民たち

がいて、そのさばきを経験することによって、その残りの者たちが、イスラエルの聖なる方、【主】に頼るようになる。という意味でもあります。

【主】は、さばきと滅びを用いて、ふるいにかけて、【主】の恵みによって選ばれた残りの民だけがイスラエル人として残るようにされるのです。ある意味では、この残りの民こそが、真の【主】の民、イスラエルと言える存在なのです。

だからですね。単純イスラエル人というそれこそ、神様がアブラハムに約束されたように、海の砂のように多くの人が該当しますけども、裁きがあってもなお、滅びがあってもなお、残るイスラエルがいて、それこそが【主】の民なのです。

だから、【主】はその残りの民たちのことを「わたしの民」といいながら、24節、25節、そして、27節のように語られます。24, 25, 27を読みます。

10:24 それゆえ、万軍の【神】、主はこう言われる。「シオンに住むわたしの民よ、アッシリアを恐れるな。彼がむちであなたを打ち、エジプトがしたように杖をあなたに振り上げても。

10:25 もうほんの少しでわたしの憤りは終わり、わたしの怒りは彼らを滅ぼしてしまうから。

10:27 その日になると、彼の重荷はあなたの肩から、彼のくびきはあなたの首から除かれる。くびきは脂肪のゆえに外される。」

神様は、敵があまりにも強くて神の民すべてが滅ぼし尽くされてしまうような状況にあったとしても、その敵を出エジプト記のエジプトのように、そして、士師記に書かれているギデオンの箇所、【主】が打たれたミディアン人のように、圧倒的な【主】の力によってその強大な敵を打倒してくださるのです。

だから、【主】の恵みによって救われた残りの民に対して、【主】は「わたしの民よ。おそれるな」と言われているのです。

聖書で、残りの民というのは、基本的にはイスラエル人のことをさしています。でも、のこりの民ではなくって、【主】が「わたしの民」といわれるとき、それはイスラエル人だけじゃなくって、【主】イエスキリストによって救われた私達も含まれています。

私達は、自分たちがさばきを経験して、残りの民になって救われる。という救われ方は経験していません。なぜならば、私達が経験するべきさばきを【主】イエスキ

リストが変わりに受けてくださったからです。キリストに対してなされた十字架のさばきによって、私達は、【主】の民とされました。

だから、私たちはある意味では、イスラエルの人たちと比べると非常に恵まれたものなんですけども、恵みによって【主】の民とされているということは、イスラエルの残りの民の人たちと同じなのです。

だから、**24節の【主】がイスラエルに対して語られた「わたしの民よ、恐れるな」**ということばは、私達に対して語られたことばでもあるのです。

敵が目の前で手をあげたとしても恐れるな)

この「恐れるな」ということばは、例え敵が目の前にきても「恐れるな」という意味が込められています。

28-32節の部分には、アッシリアがエルサレムまで侵攻するルートにある町の名前がかかれています。

例えば、**28節**のミクマスというのは、エルサレムから北東13kmにある町で、**29節**のゲバ、**ラマ**というのはエルサレムから9kmのところにある町、そして、**ギブア**はエルサレムから6km、**30節**のアナトテはエルサレムから4km、**32節**のノブに至ってはエルサレムから2kmの町です。

まさにアッシリアという敵の手がエルサレムにむかってどんどん迫ってきているというのが、**28節**から**32節**で描かれています。そして、その敵の手がまさにエルサレムを滅ぼすために振り上げられて、その手が降ろされたならば、すぐにエルサレムが滅ぼされてしまうような状態。そのような状態になったとしても、【主】はそのアッシリアを切り倒されると約束されています。

それが**33-34節**の部分

10:33 見よ、万軍の【主】、主が恐ろしい勢いで枝を切り払われる。丈の高いものは切り倒され、そびえたものは低くなる。

10:34 主は林の茂みを鉄の斧で切り倒し、レバノンに力強い方によって倒される。

ここにはアッシリアということばはないですけども、枝とか、林の茂みとか、レバノンといわれているのがアッシリアのことです。

【主】の民であったとしても、自分の眼の前まで、敵のつるぎがせまってくること

もあります。でも、【主】は「わたしの民よ。アッシリアを恐れるな」「敵を恐れるな」「それを切り倒すから」といわれるのです。

みなさん、このままでは破滅してしまう。滅んでしまう。と思うようなときにも、恐れることをやめましょう。【主】はご自分の民に対して「恐れるな」といわれるお方であり、敵を倒して守ってくださるお方だからです。

例え、敵の手が降ろされたら滅びるしか無いと思える状況であったとしても、【主】を信じて恐れることをやめましょう。

なぜならば、さばきがあっても、滅びがあってもなお残るのが、残りの民の特権であり、【主】の民の特権だからです。

【主】は寧ろ、さばきを通して義を溢れさせてくださるお方です。

この【主】を信じて、この世のものを恐れず、寧ろ【主】に対する希望と信頼をもって歩んで行きましょう。